高苑學報 第二十卷 第二期 第 112-121 頁 民國一〇四年
Journal of Kao Yuan University Vol. 20, No. 2 (2015) 112-121
ISSN: 2075-745X
高苑學報
Journal of Kao Yuan University

諺「来年のことを言うと鬼が笑う」考

花城可裕*

義守大學　應用日語學系　專任講師

摘　要

年の瀬も押し詰まった頃、他人に実現の可能性が低い来年の計画を打ち明けると、「来年のことを言うと鬼が笑うよ」と馬鹿にされる。本編はこの「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺を巡り、

1. 鬼が笑う理由は歴史的にどのように説明されてきたのか。
2. 何故「鬼が笑う」のか。

の二点を中心に考察・論述したものである。

關鍵字：鬼、諺、劉伯龍

緒　言

年の瀬も押し詰まってくると、「来年こそはいい歳になりますように」と願わずにはいられないのが人情である。「今年はどうも上手くなかった、来年こそは」と、希望に胸を膨らませて、「来年はこうしよう、ああしよう」などと計画を立てては他人に話すのだが、立てた計画が些か手前勝手で、実現不可能に聞こえる場合には、「来年のことを言うと鬼が笑うよ」などと笑われてしまうのが落ちである。年の瀬には、そんな光景を見たり、聞いたり、経験したりするものである。そしてまた誰しも、笑うのは何故、他でもない「鬼」なのであろうか、という疑問を一度ならず抱いたことがあるものと思う。

本編は、この疑問を解くべく、「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺を様々な角度から考察したものである。

1.　「鬼」とは何か

先ず、先行研究に拠って、「鬼」とは何かと言うことに就き、確認しておこう。[1]

今日の日本人は、鬼と言えば誰しも、人身ながら頭には一本か二本の角があり、口には牙が生え、虎皮の褌を締め、手には金棒を持ち、皮膚の色は赤か青で、筋骨隆々とした、人を啖らい災厄を齎す、それは恐ろしい妖怪が想像されるが、鬼の形象がこのように造形されたのは、平安後期のことであった。

平安時代以前に於いては、普段は異界に居るが、或る時この世界に現れては災厄を齎す様々なものが鬼と呼ばれていた。「鬼（おに）」の語源に就いては、日本最古の辞書である『倭名類聚抄』鬼神第五・鬼魅類第十七の以下の説が有力である。（括弧内は割注）[2]

> 鬼　四声字苑に云ふ鬼は居偉の反（和名は於爾）。或る説に云ふ、隠字（音於爾、訛也）。鬼物は隠れて形を顕すことを欲せず。故に俗に隠と曰ふなり。

つまり「鬼（おに）」は、「隠れて形を顕すことを欲」しないので、「隠（おぬ）」と言うのだと言う説である。そのような「鬼」には、「もののけ」と呼ばれる霊的な存在、「朝倉山の鬼」のような地霊や祖霊、蝦夷や肅慎人のような先住民や外国人、生霊や死霊のような怨恨や憤怒を抱いた人間の霊等々が含まれていた。

[1] 馬場あき子『鬼の研究』（筑摩書房　1988・12）や近藤喜博『日本の鬼』（桜楓社　昭和 50 年 6 月）などに拠った。

[2] 早稲田大学所蔵『倭名類聚抄』に拠る。http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho02/ho02_00399/index.html

* 通訊作者：花城可裕
電子郵件信箱：: shotei3@yahoo.co.jp

これら日本在来の「おに」に、「鬼」という漢字が当てられ、仏教の悪鬼夜叉や羅刹の形象が結び付き、地獄絵や御伽草子などにより図像化され、今日の「鬼」の形象が次第次第に確立していく。

室町時代には、それまで宮中の儀式であった「鬼遣らい」が民間に伝わり、無病息災を祈って炒り豆を撒きながら「福は内、鬼は外」と唱える「豆うち」が行われるようになる。

更に江戸時代になると、それまで人を啖らい災厄を齎す、怖い存在であった鬼の戯画化が行われるようにもなる。特に影響が大きかったと思われるのは、大津絵の「鬼の寒念仏」である。「鬼の寒念仏」は元禄の頃に創作され、大津絵の代表作として、東海道を行く旅人に親しまれ、江戸中期からは茶席にも用いられたと言う。

なお、中国で言う「鬼（キ）」とは、亡霊や死者の霊魂のことであり、恋愛もすれば、飲み食いもし、お金も使うと考えられている。

2. 現行の解釈

次に、「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺が今日、一般にどのように解釈されているのかを考察しよう。

「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺を、今（2012 年 4 月 15 日）試みにインターネット検索してみると、Yahoo JAPAN で、約 166000 件、 Googl JAPAN で約 167000 件ヒットし、多くの人がこの諺を使用したり、関心を抱いたりしていることが分かる。

また、「来年のことを言うと鬼が笑う　意味」で検索すると、Yahoo JAPAN では約 178000 件、Googl JAPAN では約 98600 件ヒットし、「来年のことを言うと鬼が笑う。なぜ？」、「どうして来年のことを言うと鬼が笑うの？」と言った記事が現れ、この質問に対して様々な回答が寄せられている。それらの回答は以下の三説に纏めることができよう。

１）将来のことなど誰にも分からないのに、実現不可能なこと計画を立てると、怖い鬼でも笑ってしまうと言う説。

２）鬼は人間の寿命を知っているので、立てた計画が実現可能なことも分かり、笑ってしまうと言う説。

３）太陽暦採用以前は、閏月が毎年変わり、新年の暦を見るまでは新年の予定が立てられなかった。それなのに計画を立てようとする人を見て鬼が笑うと言う説。

次に、「怖い」「暦」「寿命」を入れて検索すると、以下の結果が得られる。Yahoo JAPAN、Googl JAPAN ともヒット件数は同じであった。

「来年のことを言うと鬼が笑う　怖い」
約 63000 件
「来年のことを言うと鬼が笑う　寿命」
約 12800 件
「来年のことを言うと鬼が笑う　暦」
約 19400 件

この数字は単なる目安に過ぎないが検索結果からは、上掲の三説の内、１の説が最も多く行われていることが分かる。それは、「鬼が笑う」と言うのを比喩と考え、その意味を「怖い鬼でも笑うほどの可笑しなことだ」ととらえる事によって、「何故、他でもない鬼が笑うのか」と言うことについての一応の説明はつくからである。

では、何故「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺がこれ程までに親しまれているのであろうか。それは、上方の「いろはかるた」に採られたことがその大きな要因であると考えられる。「いろはかるた」は、天明（1781～1789）の頃に京都で考案され、文化（1804～1818）の頃には江戸で、1850 年頃には尾張でも作られるようになったと言うが、「来年のことを言うと鬼が笑う」は、京・大坂の「上方いろはかるた」にのみ採られており、「江戸いろはかるた」や「尾張いろはかるた」は「楽あれば苦あり」が採られている。

この諺の解説としては、鈴木棠三氏の『今昔いろはカルタ』に於ける解説が最も詳しい。以下に、要点を箇条書きにして掲げる。[3]

ア、この諺は、江戸時代の比較的早いころから、よく使われている。

イ、「三年先の事」、「三日先の事」、「明日の事」としたものもある。

ウ、「近きにおいて遠くをはかる」のは愚人の常である。未知数の未来を語ることは愚の骨頂であるということ。

エ、「烏が笑う」「天井の鼠が笑う」という言い方もある。鬼・烏・鼠が笑うのは、これらに一種の霊力を認めるからである。人間以上の霊感によって、賢愚成敗を予知すると考えられたのである。

オ、「来年のことを言う」とは、来年に希望を託することである。つまり、「捕らぬ狸の皮算用」「飛ぶ鳥の献立」「穴のむじなを値段する」というのと近い意味になる。

鈴木棠三氏は、鬼が笑う理由を、鬼が未来のことを予知できるからとしている。上掲の２の説とほぼ同じである。

[3]. 鈴木棠三『今昔いろはカルタ』（錦正社　昭和 48 年 12 月）184ｐ

3. 昔話の解釈

西日本には「来年のことを言うと鬼が笑う」の由来を説明した昔話がいくつか伝えられている。これは「上方いろはかるた」に採られたことに由来するものと思われる。筆者は以下の四つの話を探し得た。

「鬼が笑う話」(奈良県宇陀郡曽爾村)[4]
「鬼が笑った話」(熊本県益城町)[5]
「鬼が笑う」(宮崎県西諸県郡須木村原)[6]
「来年のことを言うと鬼が笑う」(島根県)[7]

以下に紙幅の関係上、その原話ではなく梗概を掲げることとする。なお、③は方言で書かれているので、東京の言葉に直して梗概を掲げる。

3.1 「鬼が笑う話」(奈良県宇陀郡曽爾村)

曽爾(そに)村というたら、大和でも一番東の端の村、隣の伊賀の国の国境。この村でも年越しが来たらヤッパリ豆まきをするそうや。最初に炒った豆は神様に、次は自分らが食べるために、最後は豆まき用の豆で真っ黒に炒ります。これは庭にまいても芽が出ないようにするためですが、なぜ芽が出るといけないのでしょう。

むかし、鬼が村に時々やってきて、牛やニワトリをとったり、娘をさらって山に逃げ帰る。それを村のもんは、都の殿様に申し上げました。賢い殿様で「鬼と喧嘩しても、はじまらん。うまいこといって、だますことじやな。」 それで使いを出して鬼に言った。鬼も沢山の軍勢と戦ってはと、素直に条件を聞いた。「もし、今後村を襲わなかったら一国の殿様にしてやる。ただし、年越しの豆の芽が出るのを見つけたら、と言う条件で」鬼は嘘でなければと念を押して引き下がりました。

それから毎年年越しのまめの芽を見つけて春先になる国中走りまわっておりました。そんなある時、良く炒ったはずの豆がなんと、芽が出ているところがあったではありませんか。鬼は喜び勇んで殿様のもとに、役人もびっくりして鬼と一緒に来てみると、影も形も無い。村人がその間に引っこ抜いたのです。「確かに このあたりや」と 鬼は探すが一向に見つからない。とうとう鬼は泣き出しました。それを見て役人も可哀相になって。「なんでもええがな。来年も年越しがあるのや。その時又、探したらええねん。」鬼は急に泣くのを止めて「なんや、来年のこと言うて…」いっぺに、わらいだしたそうや。

「来年の事をいうたら、鬼が笑う」とは、これから始まったことわざやそうやけど。ほんまやろうか。

3.2 「鬼が笑った話」(熊本県益城町)

昔々、益城に福田寺(ふくでんじ)というお寺があった。ここに高徳の和尚さんが居り、あちこちのお坊さんたちが教えを受けに集まってきましたが、その中に一匹の鬼が混じっていました。にこりともしない無愛想な鬼でしたが、よく働くので、和尚さんはとても可愛がっていました。しかし、襖や障子を揺らすほどの鼾に、他のお坊さんたちは熟睡することが出来ませんでした。そこで、鬼に外で寝るように頼みました。鬼は自分が悪いのだから仕方なく、庭に出て行き、鼾が聞こえないように、遠くの岩陰に寝ました。和尚さんは、可哀想になり、鬼に、内寺に鼾でも壊れない石の住まいを作って暮らすのはどうかと提案しました。鬼は、住まいを作り、安心して大きな鼾をかいて寝られるようになりました。今でも残っている内寺の上にある「鬼の岩屋」は、この時出来たということです。

或る時、福田寺では、益城地方でいちばん高い上徳というところにお堂を建てることになりました。上徳は、山の頂上なので、建設するのは大変な仕事でしたが、その時の鬼の働きはすばらしく、三十人分以上の仕事をしました。

こうして、思っていたより早く仕事が進みそうなので、和尚さんは、たいへん喜んで、皆に「そばきりだごじる」(蕎麦の粉で作った団子汁)ご馳走をすることにしました。

ところが、鬼は食べる量も多く、速く食べるので、他の人が一杯食べ終わったときには、大釜の中はすっかり無くなっていました。でも、鬼が喜んで美味しそうに食べるのを見ると文句も言えず、黙って我慢しました。それからの鬼は、それまで以上によく働きました。

鬼の大活躍で、立派なお堂が完成し、また「そばきりだごじる」をご馳走することになりました。和尚さんは、鬼がもう少しゆっくり食べる方法はないものかと考え、孟宗竹を割って、そばきりだごと同じ形、大きさに切って入れる方法を思いつきました。竹は軽いので浮いていますが、そばきりだごは底に沈んでいるので、食べる時には、うまくつぎ分けることができます。

鬼は大口を開けて、団子を流し込みました。すると、部屋一杯に変な音が響きました。鬼が顔をしかめましたが、飲み込んで、三杯目のおかわりをしました。すると、とうとう歯が折れてしまって、食べ

---

4. 奈良の昔話と観光スポット http://homepage3.nifty.com/hakuhou/oniwa.htm
5. 熊本ポータルサイト みなっせクマモト『肥後むかし話』http://www.evergreen-21.com/minasse/oldstory/index.html2008
6. 有馬英子ら編『日本の民話 12』(ぎょうせい 昭和 54 年 9 月)237－240ｐ
7. 福娘童話集 http://hukumusume.com/douwa/pc/jap/08/07a.htm

られなくなってしまいました。

住まいに帰った鬼は、床に就きましたが、折れた歯が痛くて眠れず、一晩中泣き続けました。

朝、心配になった和尚さんが、急ぎ足でやって来て、大泣きしている鬼に言いました。「大丈夫、大丈夫。だいぶ折れとるが、来年にはまた好い歯の生えてくるよ。泣くな、泣くな。」それを聞いた鬼は、顔をくしゃくしゃにして笑いながら、「和尚さん。それは本当のことですか？また、歯が生えるんですか。また、団子を食べられるようになるんですか？」と言いました。そして、今まで、どんなに嬉しいときでも笑ったことのない鬼が、大きな声をあげて笑いました。それからは、村人は、暇さえあると鬼の住まいを訪ねては、来年は歯が生えてくるよと言っては、鬼を喜ばせました。

「来年のことを言うと鬼が笑う」という言葉は、この時から始まりました。

3.3「鬼が笑う」（宮崎県西諸県郡須木村原）

仲の好い三人がいて、死ぬときは一緒に死のうと言っていたのだが、一人が先に死んでしまったので他の二人も死んで、三人であの世に行きました。そうしたら、閻魔様が居られたので、「私たちは何処へ行ったら好いでしょうか」と聞きました。すると閻魔様は聞きました。「お前は娑婆に居た時は何をしていた」「歯医者でした」「そうか、人の歯を痛い目にあわせて、歯を取るのだから、地獄へ行け」

「お前は何をしていた」「私はサーカスの軽業師です」「人の目を誤魔化してするから地獄じゃ」

「お前は何をしていた」「山伏でした」「お前も地獄の釜じゃ」

そして、三人が地獄に行くと、青鬼と赤鬼がいて、剣の山に登らせます。するとサーカスの人が「自分が教えるから」と言って、どうにかこうにか登ってゆき、喜んでいました。

すると鬼たちは閻魔様に、「三人を剣の山に登らせたら喜んでいますが、どうしましょうか」と尋ねました。すると、「そんなら地獄の釜に入れろ」と言ったので、ぐらぐら湯が滚っている所に連れて行かれました。すると、山伏が、「ちょっと待て」と言って、ブーウーガジャガジャガじゃとやったら、好いお風呂になり、三人とも久しぶりにお風呂に入れて好いねと喜んでいました。青鬼や赤鬼は、閻魔様に「三人ともお風呂に入って喜んでいますが、どうしましょうか」と聞くと、「そんなら、三人ともお前たちが食べてしまえ」と言われたので、青鬼と赤鬼は歯を剥き出して三人に喰いかかりました。そうしたら、歯医者さんが腰から薬を出して、鬼の歯に塗りました。すると歯がみんな落ちてしまい、鬼たちは「もう歯がないから食べられない」といって泣いたそうです。すると歯医者さんは言いました。「よかよか、来年になると歯が生える」そうしたら、鬼は喜んで笑いました。

「来年のことを言えば鬼が笑う」というのはそこから出ました。

3.4「来年のことを言うと鬼が笑う」（島根県）

昔々、とても強い相撲取りがいました。ところが突然の病で、ころりと死んでしまいました。人は死ぬと、閻魔大王のところへ連れていかれます。生きている時に良い事をした者は、楽しい極楽へ送られます。生きている時に悪い事をした者は、恐ろしい地獄へ送られます。閻魔様は、相撲取りに聞きました『お前は生きている時、何をしていた？』「はい、わたしは相撲をとって、皆を楽しませてきました」「なるほど、そいつは面白そうだ。よし、お前を極楽に送ってやろう。だがその前に、わしに相撲を見せてくれ」「でも、一人で相撲をとる事は出来ません」「心配するな。ここには強い鬼がたくさんおる。その鬼と相撲をとってくれ」

閻魔様は、一番強そうな鬼を呼んできました。相手が鬼でも、相撲なら負ける気がしません。相撲取りはしっかりと四股を踏んでから、鬼の前に手をおろしました。鬼も負けじと四股をふんで、手をおろしました。「はっけよい、のこった！」閻魔様が言うと、相撲取りと鬼が四つに組みました。鬼は怪力で相撲取りを押しますが、相撲取りは腰に力を入れて、「えい！」と、いう声とともに、鬼を投げ飛ばしました。投げ飛ばされた鬼は岩に頭を打ちつけて、大切な角を折ってしまいました。 角が折れた鬼は、わんわんと泣き出しました。「こらっ、鬼が泣くなんてみっともない！」閻魔様が言いましたが、でも鬼は泣くばかりです。困った閻魔様は、鬼を慰めるように言いました。「分かった分かった。もう泣くな。来年になったら、新しい角が生えるようにしてやる」そのとたん鬼は泣きやんで、ニッコリと笑いました。

そんな事があってから、『来年の事を言うと鬼が笑う』と、言うようになったそうです。おしまい

次に、個々の昔話に就いて考察しよう。

先ず、奈良県曽爾村の①「鬼が笑う」であるが、上掲の四つの昔話の内、この話だけが、「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺と同じ意味で、鬼が「わらっている」。「来年のことを言うと鬼が笑う」の「笑う」とは、楽しくて「笑う」・嬉しくて「笑う」のではなく、馬鹿にして「哂う」のである。それ故、奈良の「鬼が笑った話」だけが、来年のことを言うと何故鬼が「笑う」のかを説明していることになる。熊本の②「鬼が笑った話」では、来年にな

れば折れた歯が生えてくるから、宮崎の③「鬼が笑う」では、来年になったら抜け落ちた歯がまた生えてくるから、島根の④「来年のことを言うと鬼が笑う」では、来年になったらまた角が生えてくるから、鬼が嬉しくて笑うのである。つまり、熊本・宮崎・島根の昔話は、この諺の現行の意味即ち、来年のことを言うと鬼が「馬鹿にして笑う」理由を説明していない。諺の鬼が「笑う」のは、これらの昔話が創作された当時に於いても、「嬉しくて笑う」のではなかった筈である。

更に言えば、この昔話は元来「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺の由来を説明したものではなく、庭に撒く年越しの豆から芽が出ないように真っ黒に炒らなければならない理由を説明した昔話であったものと考えられる。古人は、このようにして、「何故、鬼が笑うのか」分からないながらも、木に竹を接木したような説明で、分からないことに対する名状しがたいもどかしさを押さえ込み、何とか一場の安心を得ようとしてきたのであろう。

同じように、熊本県益城町の②「鬼が笑った話」も、もともとあった、「鬼の岩屋」の由来を説明する話に、諺の由来を説明する話を付け足したのもと考えられる。「鬼の岩屋」と言うのは、この昔話の舞台となった朝来山尾根先端部南斜面に位置する六世紀後半の造営と推定される円墳「鬼の窟古墳」の事であり、横穴式石室の玄関入口は開いており、修行僧の籠りに使用されていたという。

また、昔話の舞台である福田寺は、天台宗の中世山岳寺院であり、現在は地名と福田寺坊主石塔群残欠を残すのみであるが、鎌倉時代・文永 8（1271）年8月2日の銘を持つ日本最大級の五輪塔が残っており、法城は三十六堂十二門、比叡山延暦寺にも劣らぬ大坊であったと言う。福田寺の開基時期は不明であり、廃寺になった時期も不明であるが、天正の島津の兵乱以降、皆乗寺が建立されるまでは旧福田村には寺院はなかったというので、江戸時代以前には既に廃寺になっていったものと思われる。話中に孟宗竹が出てくるが、孟宗竹が琉球を経て薩摩に伝えられたのは元文三年（1738）のことであり、時代は合致しない。つまり、この昔話には、様々な話が重層的に積み重なっているのである。その中でも、一番基層にあるのが、福田寺の高僧が仏法により「鬼」を感化した話であり、この善良でよく働く「鬼」は、曽て「まつろわぬ民」と呼ばれた山岳民であると思われる。福田寺や「鬼の岩屋」のある朝来山は、『肥前国風土記』に見える「土蜘蛛」打猴・頸猴の故地に比定されている。

つまり、益城の「鬼が笑った話」は、元々益城あった「鬼」や「鬼の岩屋」や「鬼を感化する」話の最上部に、「来年のことを言うと鬼が笑う」という諺の由来を説明する話を、「鬼」を介して載せたものであると考えられる。

宮崎の昔話③「鬼が笑う」は、上方落語の『地獄八景亡者戯』に、「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺の由来をこじつけた物である。この落語は天保 10 年（1839）に刊行された安遊山人の「はなしの種」と言う小噺本に出てくるのが最も古いのだという。この話は「閻魔の失敗」の題で日本全国で語られており、軽業師と医者と山伏の他に鍛冶屋の四人で地獄巡りをするのが元の噺である。

島根の④「来年のことを言うと鬼が笑う」という昔話は、「相撲取り」という職能者が地獄で閻魔大王に命じられて鬼と相撲を取るものであることから、「閻魔の失敗」の一類話であるとも取れるが、それよりは寧ろ、「力者（りきしゃ）」に関わる話と取る方が妥当であろう。「力者」とは、只単に腕力が並外れて強い者を言うのではなく、寺神等の神霊に奉仕する非凡な霊力を持つと考えられた人たちの事である。彼らは僧形であった為、「力者法師」などとも呼ばれていた。

霊的なものと力比べをする話、特に河童と相撲を取る昔話が全国各地で語られているが、水神の化身である河童に相撲を挑み、これに勝利するのは、只単に腕力・臂力が強いからではなく、彼ら「力者」や「力者」の末裔たる「力持ち」に、非凡な霊力と神霊の加護とがあるからと考えられてきたからである。この島根の昔話の「相撲取り」が鬼に勝つのは、そのような「力者」の系譜に繋がる者であるからと言えよう。

以上、四篇の昔話の考察から次のことが言えるものと思う。即ち、異なった土地に於いて鬼が笑う理由を説明する昔話がそれぞれに語られていると言うことは、多くの人がこの諺を聞いて、「何故、鬼が笑うのか」と疑問に思ったことの現れであり、仮令それがその場凌ぎの説明であったとしても、この疑問に対して何らかの説明が欲せられてきたことを物語っている。「オニ」と言うもの自体がそうであるように、人類には形の無いものに形を与え、混沌には目鼻を穿ち、説明の附かない物には説明を附けたい衝動があるのであろう。

以上の考察から、これら四篇の昔話は共に以前よりある話にこの諺の由来譚が附加されたものである事、昔話の語り手或いは創作者も鬼が笑う理由は分からなかった事の二点が指摘できよう。

4. 諺集の解釈

次に、年代の古い順に主だった諺集を手繰って、「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺が、文献

上どのように解釈されてきたのかを見ていこう。

鈴木棠三氏が「この諺は、江戸時代の比較的早いころから、よく使われている」言われるように、江戸時代以前の諺集である源為憲の『世俗諺文』[8]や菅原為長の『管蠡抄』や著者不詳の『北条氏直時分諺留』にこの諺は無く、江戸初期の正保二年(1645)に刊行された松江重頼の『毛吹草』にも見えない。

「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺の文献上の初出は、明暦二年(1656)に編纂された僧空願の『世話尽』である。巻二の「曳言之話」に七七五項の俚諺がいろは順に配列されており、「来年をいへば鬼が笑ふ」の形で収録されているが、意味や解説は附されていない。

これに続く、元禄八年(1695)に刊行された著者不詳の『世話重寶記』、元禄十四年(1701)に刊行された貝原好古の『諺草』、正徳五年(1715)に刊行された井沢長秀の『本朝俚諺』には無いが、宝永七年(1710)に原刻本が刊行された江島其磧の浮世草子『寛濶役者片気』上之巻[9]には、「人の命は明日をも知らず。来年の事を言へば。鬼が笑ふとやら」の文言が見え、文中「とやら」と書かれていることから、この諺がこの時期既に一般に使用されていたことが分かる。

安永五年(1776)の序を持つ僧恵海の『類聚世話百川合海』には、「来年の事謂ば鬼が哂(わらふ)」の形で、天明七年(1787)に浄書が成った松葉軒東井の『譬喩尽』[10]には、「来年の事いへば鬼が笑ふ」の形で収録されており、共に解説は無い。

寛政九年(1797)の序を持つ大田全斎の『諺苑』には、「来年ノコトイヘハ鬼カ笑フ」の形で収録され、「アスノコトイヤ鬼カ笑トモ鼠カ笑フトモ」の割注が施されている。なお、この書は、同じく寛政九年(1797)の自序を持つ大田全斎の『俚言集覧』の稿本であり、その『俚言集覧』にも「来年の事いへハ鬼か笑ふ」の形で収録され、「あさの事いへは鬼が笑ふ共鼠が笑ふとも云〔世話盡〕来年をいへハ鬼が笑ふ」と言う解説がある。

以上見てきたように、江戸時代の諺集には、この諺に関する解説らしい解説は書かれていないことが分かる。これが、明治期に出版された諺集や諺辞典になると一変して多くの解説を附するようになる。以下にそれらを読み仮名と訓点は省略して掲げる。

明治三十二年(1899)朗月堂刊、高宮感斎編、高橋天淵訂『俚諺通解』[11]には、「来年の事を言へば鬼が笑ふ」の形で収録され、「人の命の長短固より期すべからず、今年にして来年の事を予想するは愚の限りなり」と言う解説及び、「五色線云、宋ノ劉伯龍　家貧し嘗て家にありて明年は己の領下の年貢法を改めんと計る、忽ち傍に鬼ありて大に笑ふ伯龍嘆じて曰貧窮固より命ありと遂に止む」と言うこの諺の典故が示されている。

明治三十三年(1900)文港堂刊、衣笠宗元編『世諺叢談』[12]には、「来年の事を云へば鬼が笑ふ」の形で収録され、「来年の事は遠く未来に属すれば、人の禍を喜ぶ鬼どもの笑ふといひけむ、然もありなむ、来年の事は姑く置き、明日をも知らぬ露の命なれば、脚下に如何なる禍機や伏すらむ、いとも危き事ども なり。さるを利にのみ耽りて天命の程を知らず、與はぬ願ひをするは、凡庸の常とはいへ、淺猿しき事の限りならずや。」と言う解説と、「事文類聚前集巻三十六(貨殖家類　為鬼所笑)曰。宋劉伯龍位九卿郡守。貧窶尤深。常在家慨然，將營什一之方。一鬼在傍撫掌大笑。伯龍歎曰。貧窮固有命。乃復為鬼所笑。遂止。」と言う典故、「九卿」「貧窶」「什一之方」の註釈、「鬼能く命を知る、而して伯龍の命、終に貧を免るべからず、故に鬼其の利を為すことの徒労なるを笑ふたるなり、是れより與はぬ願望をするを鬼が笑ふと云ふ、」との文言が書かれている。

明治三十四年(1901)青木嵩山堂刊、幹河岸貫一編『俗諺辭林』[13]には、「来年の事をいへば鬼が笑ふ」の形で収録され、「人生朝露の如くなるをいふ」との解説が附されている。

同じく、明治三十四年(1901)八尾新助刊、松本真弦編『皇国俚諺叢』には、「来年をいへば鬼が笑ふ」の形で収録され、「〔世話盡〕○来年の事言へは鬼がわらふ。あすの事いへは鬼が笑ふ」と言う記事と荒井堯民著『談鋒資鋭』の以下の一文を掲載している。

> 〔南史〕に云、劉伯龍少くして貧薄なり、武陵の守となりし頃、貧尤甚し、左右を召て什一を営まんとす、(金を糶し利足をとる術なり)忽一鬼あり、手を撫ちて大に笑ふ、遂に止めて曰く、是を管子に聞く釜鼓満れば人是を概す、(概はとかきといふ物にて枡の外へあまるをかきをとすなり)人満れは天是を概す、夫貧にして安んする事を知らず、鬼の為に笑はる、富んて足るを知らされは、天の為に概せらる、只よく貧富に居るもの、天概を施す所なし、鬼も亦いづく

8. 以下、特に注を入れていない諺集は、ことわざ研究会編『俚諺資料集成』全12巻(大空社　1986年6月)に拠った。
9. 八文字屋本研究会編『八文字屋全集』所収(汲古書院　1993年3月)に拠った。
10. 松葉軒東井『譬喩盡』(同朋舎　1979年11月)253ｐ
11. 同書103-104ｐ
12. 同書238－239ｐ
13. 同書158ｐ

んぞ揶揄せんや、〔荒井堯民談鋒資鋭〕

明治三十九年（1906）、金港堂刊、熊代彦太郎編『俚諺辞典』[14]には、「来年の事言へば鬼笑ふ」の形で収録され、「来年の事は姑く置き、明日をも知れぬ無常の世なるに徒に来年の事を云々するのは浅猿しとなり。又遠き未来の事は必ずしも当にならぬとの意なり。『事文類聚』宋劉伯龍歴位九卿郡守。貧窶尤甚。常在家慨然。將營十一之方。一鬼在傍。撫掌大笑。伯龍歎曰貧窮固有命。乃復為鬼所笑。遂止。『雞肋編』人作千年調。鬼見拍手笑。」の解説がある。

明治四十二年（1909）、矢島誠進堂刊、久原茂著『俚諺通解』[15]は、「来年のことをいへば鬼が笑ふ」の形で収録し、「遠き未来のことは必ずしも当にならぬものとの意。」と言う解説を載せる。

明治四十三年（1910）、有朋堂刊、藤井乙男編『諺語大辞典』[16]は「来年ノ事ヲイヘバ鬼ガ笑フ」の形で収録し、「未来の事は豫知すべからずの意。烏ガ笑フとも、又、明日ノ事ヲイヘバ天井デ鼠ガ笑フともいふ。〔役者気質〕人の命は明日をも知らず、来年の事をいへば鬼が笑ふとやら。〔世話盡〕来年ヲイヘバ鬼ガ笑フ。〔通俗編〕十九、人作千年調。鬼見拍手笑。鷄肋編、載北宋俚語雲々、又雲溪友議、朗公楚志詩、世無百年人。擬作千年調。打鐵作門限。鬼見拍手笑。Boast not thyself of to-morrow for thou knowest not what a day may bring forth.」と言う解説が施されている。

以上の事実から、以下の『南史』巻十七　劉粹列傳[17]所載の「劉伯龍の故事」が「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺の典故であると言えよう。

> 損、同郡の宗人に劉伯龍なる者あり，少くして貧薄，長ずるに及んで，尚書左丞，少府，武陵太守を歴位するも，貧窶尤も甚し。常に家に在りて慨然し，左右を召して將に十一の方を營まんとするに，忽ち一鬼の傍らに在りて掌を撫して大笑するを見る。伯龍歎じて曰く：「貧窮固と命有り，乃ち復た鬼の為に笑ふ所と為す也」と。遂に止む。

5.　典故と藍本

第四章に於ける考察に拠って、「劉伯龍の故事」がこの諺の典故であることが分かったが、明治三十年代以降の書物には、

1、「五色線」
2、「事文類聚」前集
3、荒井堯民著『談鋒資鋭』
4、『雞肋編』
5、『通俗編』

がこの諺の典故を載せた書物として掲げられていた。以下にこれらの書物に就いて考察をしよう。

先ず、3の荒井堯民著『談鋒資鋭』[18]であるが、「遂に止めて曰く」以下の文は『南史』巻十七「劉粹列傳・劉損」には無く、荒井堯民の創作であると考えられる。また、『談鋒資鋭』は文政 12 年（1819）の刊行であるから、明暦二年（1656）刊行の『世話尽』より遥か後の書物であり、『談鋒資鋭』をこの諺の典故を載せた書物として掲げるのは適切ではない。

次に、5の『通俗編』[19]であるが、この書物は、清代の翟顥の撰であり、乾隆十六年（1751）序があることから、これも『世話尽』より後世のものである。

4の『雞肋編』[20]であるが、この書物に「人作千年調。鬼見拍手笑。」と言う王梵志の詩句は見えない。しかし、「劉伯龍欲謀什一而為鬼揶揄則貧富固有定分非智力所能移也」の文言は見える。引用に誤りがあると言えよう。

1の『五色線』の通行本の通行本は、明代・陶宗儀撰『說郛』[21]所載の版本と清代馬俊良輯『龍威祕書』[22]第五集「古今叢説拾遺」所載の版本とがあり、両書所収の『五色線』「鬼笑貧」の項を見ると、共に「劉伯龍家貧將營十一之方，忽見一鬼在旁撫掌大笑。伯龍嘆曰貧窮固有命。遂止。」とある。しかし、『俚諺通解』にある如く、「嘗て家にありて明年は己の領下の年貢法を改めんと計る」とは書かれてお

---

14. 同書 535ｐ
15. 同書 103－104ｐ
16. 同書 1063ｐ
17. 李延寿　百衲本『南史』（浙江古籍　1998 年 5 月）931ｐ　原文は、「損同郡宗人有劉伯龍者，少而貧薄，及長，歴位尚書左丞，少府，武陵太守，貧窶尤甚。常在家慨然，召左右將營十一之方，忽見一鬼在傍撫掌大笑。伯龍歎曰：「貧窮固有命，乃復為鬼所笑也。」遂止。」
18. 新潟大學・佐野文庫所蔵 http://collections.lib.niigata-u.ac.jp/bibliograph/item/3913/
荒井堯民：名は繇行。字(あざな)は堯民。通称は次郎右衛門。号は晴湖。文政の頃の江戸の人。奥小姓膳番頭取白須甲斐守の用人。占いをして口に糊した。大田錦城に師事。著作に「梧坡教諭」「談鋒資鋭」「龍背師伝図説」「龍背発秘」等がある。
19. 國泰文化事業有限公司版。民國 69 年 1 月。431ｐ
20. 『景印文淵閣四庫全書』子部『雞肋編』巻下　1039－199ｐ
21. 『景印文淵閣四庫全書』子部『說郛』巻二十三上　877－313ｐ
22. 新興書局版。民國 58 年 2 月。1182ｐ

らず、「明年は」の語も無い。

最後に２の『事文類聚』前集[23]一七〇巻であるが、後に元代の富大用が新集三十六巻・外集十五巻を、祝淵が遺集十五巻を追加し、総計二三六巻からなる大部であるが、上古から宋代までの事物や詩文などを分類編纂した簡便な書物であった為に、安土桃山時代以降大いに流行した。直江兼続の禅林文庫や、山口県の文化財に指定されている嘯岳鼎虎禅師手沢本に朝鮮古活字本の『新編古今事文類聚』が収められていることは好く知られているし、古義堂旧蔵本には明版の『新編古今事文類聚』が収められている。また、『世話尽』よりは時代が下がるが、寛文六年（1666）と文化五年（1808）に和刻本も出版されている。このような状況から考えると、『説郛』や『南史』からの可能性も排除できないが、『事文類聚』前集が「来年のことを言うと鬼が笑う」と言う諺の藍本である可能性が高いと思われる。

6. 結　語

笑うのは何故、他でもない「鬼（おに）」なのか、以下に結論を述べよう。既に述べた如く、それは、『南史』巻十七「劉粹列傳」に見える、劉伯龍が税を上げようとして「鬼（キ）」に笑われた故事がこの諺の典故であるからである。しかし、諺が作られる際に元来の亡者や死者の霊魂の謂いである「鬼（キ）」ではなく、日本の妖怪である「鬼（おに）」に修した為に笑う理由が分からなくなってしまったのであった。この「鬼（キ）」が笑ったのは、「鬼（キ）」には未来のことを予知する能力があるからであるが、清代の袁枚が著した『續子不語』 第四巻に「劉子壯」[24]と題する以下の如き話がある。

> 明末、湖廣の黄岡州の張某の子病重くして、鬼の為に迷ふ所となる。一鬼既に集まり、群鬼皆至る、飯を索め紙銭を索むる者門に紛集す。劉克猷先生適きて門を推して入るに、群鬼驚きて曰く：「狀元來たる！我輩且つ避けよ」と。一老鬼走る、頭を回して笑ひて曰く：「紗帽戴かざる狀元、吾何ぞ懼（おそ）れん哉？」病人恰（まさ）しく愈ゆ、衆人解らず。

後、劉、本朝の狀元に中（あ）たる。方に老鬼の揶揄を悟る也。

文中の老鬼が見た劉克猷の未来の姿は、明朝の紗帽を被った狀元ではなく、清朝の官帽を被った狀元だったということである。斯くの如く、中国に於いて「鬼（キ）」とは、未来を予知するものだと観念せられてきたのであった。未来予知をするというのは、日本の「鬼（おに）」には馴染まないが、鬼（おに）に未来予知の能力がなければこの諺は成り立たない。それで益々混乱してしまったのである。江戸後期に至って「明日のことを言えば鼠が笑う」という形が現れたのは、「鬼（おに）」が未来予知することが出来るという事への違和感と、鼠が火事や地震を予知して逃げ出すのを目の当たりにした、江戸時代の人々のつまらない合理精神に拠るのではないだろうか。鼠が笑うより鬼が笑う方が、諺としての出来は遥かに好い。

ともあれ、鬼（おに）が笑うと言うのは甚だ近世的な発想である。鬼（おに）は、中世以前は人を啖う恐ろしい存在であったからである。この諺からは、織田信長の比叡山焼き討ちやキリシタンの流行に因って、伝統的な宗教や価値観に変化が生まれ、鬼（おに）も専ら畏怖するだけの対象ではなくなってしまい、悪魔の居ない日本にあっては、最も恐るべき存在である「鬼（おに）」を笑わせるだけの精神上の余裕が人々の間に醸成されていたことも伺えるものと思う。

最後に附言しておくと、「蓼食う虫も好き好き」という諺があるが、これは南宋・羅大経著『鶴林玉露』巻之三丙編中の言葉「冰蠶不知寒，火鼠不知熱，蓼蟲不知苦，蜘蛆不知臭（氷蚕は寒さを知らず、火鼠は熱さを知らず、蓼虫は苦さを知らず、ウジ虫は臭さを知らず）」に由来する諺である。斯くの如く、一般に日本の諺と考えられているものの中にも中国由来の諺がある。「来年のことを言うと鬼が笑う」もまた、その様な諺の一つであったのである。

23.『和刻　新編古今事文類聚』（ゆまに書房　1982年10月）472ｐ〔寛文版〕

24. 原文は「明末，湖廣黃岡州張某之子病重，為鬼所迷。一鬼既集，群鬼皆至，索飯索紙錢者紛集於門。適劉克猷先生推門而入，群鬼驚曰：「狀元來了！我輩且避。」一老鬼走矣，回頭笑曰：「沒紗帽戴的狀元，吾何懼哉？」病人恰愈，眾人不解。後劉中本朝狀元，方悟老鬼之揶揄也。」
http://www.open-lit.com/listbook.php?cid=4&gbid=160&bid=8718&start=0

参考文献・引用文献（日本図書）五十音順

1. 馬場あき子『鬼の研究』（1988 年 12 月、筑摩書房）
2. 藤井乙男編『諺語大辭典』（1910 年、有朋堂）
3. 松本真弦編『皇國俚諺叢』（1901 年、八尾新助刊）
4. 鈴木棠三『今昔いろはカルタ』（1973 年 12 月、錦正社）
5. 祝穆ら『和刻　新編古今事文類聚』（1982 年 10 月、ゆまに書房）
6. 衣笠宗元編『世諺叢談』（1900 年、文港堂）
7. 幹河岸貫一編『俗諺辭林』（1901 年、青木嵩山堂）
8. 近藤喜博『日本の鬼』（1975 年 6 月、桜楓社）
9. 有馬英子ら編『日本の民話 12』（1979 年 9 月、ぎょうせい）
10. 八文字屋本研究會編『八文字屋全集』第二巻所収「寛潤役者片気」（1993 年 3 月、汲古書院）
11. 松葉軒東井『譬喩盡』（1979 年 11 月、同朋舎）
12. ことわざ研究会編『俚諺資料集成』全 12 巻（1986 年 6 月、大空社）
13. 久原茂著『俚諺通解』（1909 年、矢島誠進堂）
14. 高宮感斎編、高橋天淵訂『俚諺通解』（1899 年、朗月堂）

参考文献・引用文献（中国図書）　画数順

1. 李延壽　百衲本『南史』（1998 年 5 月、浙江古籍出版社）
2. 翟顥『通俗編』（1980 年 1 月、國泰文化事業有限公司版）
3. 程章燦『鬼話連篇』（2011 年 5 月、広西師範大学出版社）
4. 陶宗儀『說郛』（『景印文淵閣四庫全書』版）
5. 馬俊良『龍威祕書』（1969 年 2 月、新興書局版）
6. 莊季裕『雞肋編』（『景印文淵閣四庫全書』版）

参考サイト・引用サイト　　五十音順

1. 熊本ポータルサイト、みなっせクマモト『肥後むかし話』「鬼が笑った話」 http: //www.evergreen-21.com/minasse/oldstory/index.html2008（2012 年 4 月 15 日閲覧）
2. 袁枚『續子不語』 http://www.open-lit.com/listbook.php?cid=4&gbid=160&bid=8718&start=0（2014 年 11 月 12 日閲覧）
3. 奈良の昔話と観光スポット、「鬼が笑う話」 http://homepage3.nifty.com/hakuhou/oniwa.htm（2014 年 11 月 12 日閲覧）
4. 新潟大學・佐野文庫所蔵、荒井堯民『談鋒資鋭』（文政 12 年（1819））
5. http://collections.lib.niigata-u.ac.jp/bibliograph/item/3913/（2014 年 11 月 12 日閲覧）
6. 福娘童話集、「来年のことを言うと鬼が笑う」 http://hukumusume.com/douwa/pc/jap/08/07a.htm（2014 年 11 月 12 日閲覧）
7. 早稲田大学所蔵『倭名類聚抄』 http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho02/ho02_00399/index.html（2014 年 11 月 12 日閲覧）

高苑學報 第二十卷 第二期 第 112-121 頁 民國一 O 四年
Journal of Kao Yuan University Vol. 20, No. 2 (2015) 112-121
ISSN: 2075-745X
高苑學報
Journal of Kao Yuan University

"Talk about next year and the devil will laugh at you"

HANASHIRO,Yoshihiro *

Lecturer Department of Applied Japanese I-SHOU UNIVERSITY, Kaohsiung, Taiwan, R. O. C.

Abstract

It's approaching the end of the year and when trying to confide his unrealizable plans for the next year to others usually will be laugh at by saying this proverb"Talk about next year and the devil will laugh at you [来年の事を言うと鬼が笑う]".
This paper investigates this proverb at the followings points.
1. The explanations and reasons for this proverb from the historical prospects.
2. Why "devil will laugh" .

Keywords: Oni, Devil, Proverb, Liu Bo- long

* Correspondence to: HANASHIRO, Yoshihiro
E-mail address: shotei3@yahoo.co.jp